

## 2歳児保育の遊びにおける製作コーナーの意義について —保育者と幼児との同調関係と“見る—見られる”関係の構築—

The Meaning of Making a Corner in the 2-Year Old Class for Playtime  
—Forming of the Synchronal Relation and the Seen Relation to See Each Other for  
Kindergarten Teacher and Child —

高橋 健介\* 中山 昌樹\*\* 中田 幸子\*\* 猪越 恵美\*\*  
TAKAHASHI Kensuke NAKAYAMA Masaki NAKADA Sachiko INOKOSHI Megumi

### 要旨

2歳児保育の遊び場面における保育環境としての製作コーナーの意義やその環境を用いた援助のあり方を、製作コーナーを常設している認定こども園2歳児クラスの保育実践およびその観察記録から検討した。2歳児保育の遊び場面において、製作コーナーで保育者が意図的にモノを用いた手の動き（遊びモデル）を提示することで、保育者と幼児とにモノを用いた同調的な動作共有が起こる。この保育者と幼児との作業をともなう同調関係が築かれることで、幼児は製作コーナーを安定した居場所とし、モノとかかわりながら主体的に遊びを展開していくことが考えられた。さらに、保育者と幼児との同調関係を基盤に、保育者と幼児、幼児同士の間で“見る—見られる”関係が築かれていく。そのなかで、幼児達は互いに真似し合い（学び合い）ながら、遊びの幅を広げていくようになることが考えられた。

キーワード：2歳児保育、遊び、製作コーナー、同調関係、“見る—見られる”関係

### 1. はじめに（研究目的）

本研究の対象となった認定こども園では、2歳児保育（2～3歳児を対象にした保育）を、0・1歳児保育の“個々の対応を中心とする家庭的な保育”から3歳児保育以降の“集団での遊びを中心とする保育”への移行期と位置づけ、保育の実践をおこなってきている。よって、このような移行期と位置づける本園の2歳児保育では、保育者と幼児とのかかわりを基盤に、幼児同士が遊びを通してかかわり合いをもてるようになることを重視している。そこで、保育者とクラスの複数の幼児達との安定的なかかわり合いが生じやすい場として、製作コーナーが保育環境として意味をもつのではないかと考えた。なぜならば、製作コーナーでは、保育者や幼児は素材や道具を用い、手を動かしながら作業をおこなうことが多いため、そこでの作業は「個別に行われことが多いが、同じ空間で向かい合って座り、保育者や他児と同じように手を動かすことで、同調的な動き」<sup>1)</sup>となり、幼児の安定した居場

---

\*東洋大学ライフデザイン学部生活支援学科 Toyo Univ. Faculty of Human Life Design

連絡先：〒351-8510 埼玉県朝霞市岡48-1

\*\*認定こども園あかみ幼稚園

所となることが考えられるからである。

そこで本研究の目的は、2歳児保育において、保育者と幼児とのモノを用いた同調的な動作共有から、幼児同士のかかわり合いが生じるその過程を、製作コーナーを常設している2歳児保育の観察とその記録から検討していきたい。さらに、そのことを通して、2歳児保育における保育環境としての製作コーナーの意義やこのような環境を用いた援助のあり方を探究したいと考える。

## 2. 2歳児保育における幼児間の関係性と製作コーナー

### (1) 発達研究における2～3歳児の共同性

近年の発達研究では、2～3歳児の遊び場面での初期の共同性が改めて注目されている。それまでの発達研究では、木下(2012)<sup>2)</sup>が指摘するように、2歳児を対象にしたものは少なく、その発達の道筋について、十分にその知見が得られていたとは言い難かった。よって、保育所等の2歳児クラスでの幼児間の関係性およびそれに対する保育者の援助についても、それとしてはとても意味があると考えられるのだが、当事者である保育者側の経験知から語られることが多かった。一方で、2歳児保育は、そのクラスにおいて、10～18名の複数の幼児達を対象にした実践が多いことを考えるならば、幼児集団を対象とする保育として、この時期の幼児間の関係性について、発達の見地からまずはその知見を得ることは必要であろう。そこで本項では、2～3歳児の遊び場面での幼児間の共同性について、その主な発達研究を概観してみたい。

山本(2000)は、2歳から3歳前半頃の幼児の遊びにみられる初期の共同性を「遊びの伝染」と位置づけ、以下のように述べている。<sup>3)</sup>

発生的にみたとき、子どもが自発的に形成する集団的な活動は、伝染という形で成立し始めます。この伝染というものは、単なる活動の模倣というよりも、遊びの気分などの情緒的、情動的な側面を合わせもち、子どもを遊びに向かわせる動因を含みこむ全体的な性質をもつ現象です。

ここでの山本は、2歳から3歳前半頃の遊びにおける初期の共同性は、意識的に他児の活動を見て真似るといった模倣によるつながりよりも、「情緒的、情動的」といった感覚的な側面によるつながりが強いと説いている。つまり、この時期の遊びは、ある段階においては、他児の動作を意識的に真似ることによるよりも、場を共有し、例えばモノを用いた手の動きが起こる。このような動作が感覚的に共有されることによって、他児とのコミュニケーションの基盤を築いていることが考えられる。

無藤(1997)においても、感覚的な側面による2歳半児の初期の共同性を「相互模倣」と捉えている。さらに、この「相互模倣」について、「基本としては同じことをすることが“一緒”であること、つまり協同性を確立する基盤なのだろう。」<sup>4)</sup>と述べ、この時期、幼児同士が相互に同じ動作を共有する(模倣し合う)ことが、これ以降のコミュニケーションの基盤になっていることを明示している。また、瀬野(2010)は、この「相互模倣」の意味を、幼稚園の2歳児クラスの遊び場面の観察を通して詳しく論じている。その観察の前半部で、「相互模倣」が頻繁に観察されており、このような現象を、以下のように解釈している。<sup>5)</sup>

おそらく、仲間同士で遊びが生まれる上で最も重要なのは通じ合う共通の基盤なのであろう。相互模倣は、目に見える事物や動きを媒介にして自他を一体化させる結びつきを作ったり、コンタクトの成立を確認することで共通の基盤を形成する役割を果たし、それが、後の言語（表象）で世界を共有する対話の基礎を形作っていくのではないだろうか。

さらに、瀬野（2012）は、ワロンやメルロ・ポンティの考えに添いながら、この時期に特徴的にみられる「相互模倣」について、改めて以下のように述べている。<sup>6)</sup>

相互模倣は、〈自己意識〉と〈他者意識〉が未だ分化していない時に出現する、1つは共感のあり方と考察できます。自己や他者という明示的な区別がない状態で、自他が融合している、その心地よさがコミュニケーションの根っこにあると言えるでしょう。

つまり、「相互模倣」とは、幼児にとって意識化された模倣ではなく、感覚的に共感されることによって、幼児同士の関係性が互いに心地よいものとなっていくことを説いている。幼児にとって、互いに同じ動きをするような感覚、この同調性をともなう関係こそが心地よく、情緒的にも安定した関係となり、他児とのコミュニケーションを築く基盤になっていることが考えられる。

では、この時期の感覚的な側面による幼児間の関係性は、これ以降どのような発達の道筋をたどるのであろうか。山本（2000）は、動作共有などによる「情緒的、情動的」な「遊びの伝染」から、意識的な模倣活動に至る道筋を以下のように述べている。<sup>7)</sup>

「伝染」という現象は明確な意識化を必要とせずに成立し、またそこで成立した集団的な活動は個人間の意識的な調整過程を必要とすることなく展開していきます。（中略）やがてこの情動的な状態の伝染・共有のなかに、自他の分節化という契機を含む模倣活動という新たな伝染形態が入りこんできます。

つまり、この時期の他児の遊びを意識的に見て真似るといった学びの契機となる活動、またその関係性は、それ自体が独自の道筋をたどって起こるのではなく、他児と同調的に動作を共有する、このような初期の共同性を基盤にして起こっていることが考えられるのである。

ここまで示した発達研究の成果からは、2歳児保育の遊びにおける他児とのかかわり、またそれ以降の仲間関係は、幼児間の同調的な動作共有が基盤となっていることが考えられた。一方で、ここで上げた発達研究で例示された幼児同士の初期の共同性は、遊び場面での幼児自身の行為が契機となっている。確かに、2歳児保育において、ある幼児の遊び行為が、場を共有する他児との共同性につながっていくことは、しばしば見られることである。しかしながら、保育実践を保育者の意図的な営みと捉えるならば、幼児間の共同性の契機を、モノとかかわる幼児側の行為として想定するだけではなく、保育者の意図的な役割行為として位置づけることはできないだろうか。保育者が意図的にモノとかかわり、手を動かすことで幼児達が同じようにモノを用いて手を動かす、この保育者と幼児お

よび幼児間の同調的な動作共有を促す援助行為は、保育者のだいじな役割の一つと考える。さらに、このような同調的な動作共有がより可能となる場合は、保育環境として構成された製作コーナーが想定されるのである。

## (2) 2歳児保育の保育環境と製作コーナー

前項では、近年の発達研究の成果から、2歳児保育の遊びにおいて他児とのコミュニケーションの基盤となるのが同調的な動作共有であると考えた。さらに本研究では、このような幼児同士の同調的な動作共有への契機には、幼児自身の行為だけではなく、保育者がモノを用いた手の動きを提示することで幼児と同調する、そのような意図的な働きかけが必要と考える。また、このような同調的な動作共有が状況的に起こり得る保育環境を構成していくことも必要である。そこで本項では、2歳児保育における保育環境としての製作コーナーの意義とその場での援助のあり方をさらに検討していくために、これまでに2歳児保育の遊びにおいて、保育環境はどのように論じられているのか、その主な内容について触れてみたい。

阿部(2003)は、2歳児保育の核を、「探索活動を十分に展開することであるが、そこに子ども同士のやりとり(一緒に遊ぶ、玩具を取り合うなど)も十分に展開することである」<sup>8)</sup>と論じている。さらに、千葉県のとある市内の保育所2歳児クラスの保育環境が、保育室内を“区切らない”といった傾向(73%)にあることを、保育者側の管理(死角をつくらない等)という視点が強いと捉えた上で、2歳児の発達の特徴である「(自分で)することのこだわり」から、“区切る”ことの意味について、以下のように述べている。<sup>9)</sup>

衝立で自分の空間を囲うことは、とりあえず今の欲求を実現するための(自分の)領域を獲得するというものである。これらの経験が重ねられ、その具体的な経験が内在化されることで、そこが他とは異なる領域として区別され、その領域の所有者としての「私」(自己の領域)の獲得へとつながっていくことが考えられる。

ここでの阿部は、2歳児保育の保育環境として、幼児が囲われた空間で自己の世界を築いていくことを重視している。確かに、この時期の幼児が思う存分にモノとかかわり、こうしてみたいといった意志や自己のイメージの世界を築いていくことは重視されるべきことである。一方で、このような視点のみではなく、先に阿部が2歳児保育の核の一つと位置づけたように「子ども同士のやりとり」についても、保育環境を構成する上での視点として含み入れることが必要と考える。

その点において今井(2006)は、2歳児保育の遊びにおける保育環境について、他児とのかかわりを視野に入れながら、以下のように述べている。<sup>10)</sup>

環境構成の視点は、友だち遊びが生まれるような大きな遊具、あるいは押入れの下などを利用して子どもたちが隠れたり入り込んだりし、おとなが介入しない子どもだけの世界を作ることが可能な環境である。たとえば大きなダンボール箱で大型バスを作っておく。するとそこに興味をもった子どもたちが集まってきて、同じイメージで遊びだす。友だちと共通のイメージで遊ぶことができ

ることは、友だち関係が生まれやすいということである。

今井は、2歳児保育において、仲間関係が生じやすい環境を少人数で入ることが可能な小空間と説いている。確かに、小さめな空間に複数の幼児が入り、そこでモノとのかかわりが起これば、幼児間の距離が近いこともあり、互いに同調的に動作をおこない、幼児同士のイメージの共有につながっていくことが考えられる。一方で今井は、「友だち遊びが生まれる」ための環境構成の一つの視点として、「おとなが介入しない子どもだけの世界を作る」と述べているように、物的環境の整備を重視していることがうかがえる。もちろん、ここでの保育者は物的環境を構成するだけに留まらず、幼児達の様子を少し離れた場所から見守り、必要な際にかかわることを想定していることも考えられる。とは言え、この時期の遊びでの共同性に向けた環境構成の観点に、物的環境を整備した上で、さらに人的環境としての保育者の存在や関与をもう少し積極的に位置づけることはできないだろうか。ただし、関与するとは言っても、遊びにおいてその主体が幼児にあることは尊重されるべきである。このような観点からも、人的環境としての保育者が、製作コーナーで意図的に作業モデルを提示することで、幼児達が自ら同じように動作を起し、それによって同調関係を築いていくといった遊びの援助が考えられるのである。

本研究の対象となった認定こども園の2歳児保育において、その園内研修の講師を担っている小川は、安定した居場所をもてずにいる幼児が複数いる保育課題に対し、「小さいクラスの製作コーナーでは、ノリを合わせるといった観点から、もっと粘土あそびに重点を置くとよい。」と指導したとのことである。<sup>11)</sup>つまり、保育者が製作コーナーにおいて、粘土をこねる、丸める、形づくるなど、繰り返し手を動かすといった遊びモデルを意図的に提示する。この保育者の手の動きに幼児達が引きつけられ、同じように手を動かす、この同調性によって、製作コーナーが幼児にとって心地のよい居場所となる。ここで保育者が遊びモデルに用いる粘土は、こねる、丸めるなどの手を使った大きな動作が繰り返しおこなわれるため、この時期の幼児には分かりやすく、同調しやすいといった素材としての意味をもっているのである。さらに、製作コーナーにおいて、複数の幼児達が同調した動作をおこなうことによって、安定した居場所のなかで幼児同士がコミュニケーションを築いていくことが考えられる。実際に、本園2歳児クラスの保育者が、製作コーナーで粘土を用いた遊びモデルを提示したことで、多くの幼児達がそれに同調し、安定して遊びを展開し始めたとのことである。

また、小川(2010)<sup>12)</sup>は、製作コーナーにおいて、保育者と幼児との間に作業をともなう同調関係が築かれることによって、保育者と幼児との次の関係性、さらに幼児間の関係性にもつながっていくことを以下のように明示している。

幼児たちが、保育者のつくる活動に誘発されて、一度、製作コーナーでつくる活動が活発になると、幼児たちはひたすら手を動かす動きのリズムが成立してくる。このリズムのノリはやがてその他のコーナーの遊びのノリにも伝わるのである。そして、さらに大切なことは、保育者の動きを「見てまねる」という学びが成立すると、幼児同士お互いに「見てまねる」という学びが成立するのであり、幼児相互に「まなびあい（まねをし合う）」の変化が成立するということである。

小川のこの議論は、2歳児保育の保育者と幼児との関係に限定して論じられているのではないが、製作コーナーの幼児達が同調的動作共有を基盤に、さらにどう関係性を築いていくのかについて示唆を与えてくれる。製作コーナーでは、保育者の手の動きやその動きのリズムが契機となって、幼児との同調的動作共有が起こる。その関係を支えにして、さらに保育者の作業（遊び）モデルを見て真似る（学ぶ）といった関係になっていくことが考えられるのである。もちろんこの関係のなかには、作業をおこなう幼児の様子を見ている保育者の存在があることも確かなことである。つまり、保育者と幼児は、互いに“見る－見られる”関係になっていくのである。

このような保育者と幼児との間に互いに“見る－見られる”関係が築かれることで、製作コーナーがさらに安定した居場所になり、この時期の幼児にとっても、さらに作る活動（遊び）が主体的に展開されることが考えられる。そして、幼児は、製作コーナーという安定した場を共有する他児の作る活動や作ったモノを用いた遊びにも関心を向け始める。お互いの遊びを見て真似ることで、幼児同士においても“見る－見られる”関係、さらに真似し合う（学び合う）関係が築かれ、幼児達は遊びの幅を広げていくことが考えられるのである。<sup>13)</sup>

### 3. 認定こども園A幼稚園の2歳児保育における製作コーナーとその実践

#### (1) 認定こども園A幼稚園2歳児クラスの概要と保育環境としての製作コーナー

対象となる認定こども園A幼稚園の2歳児クラス（幼児18名）では、3名の保育者のうちその1名がリーダーとなる担任保育者、その他の2名が副担任保育者として、本クラスの保育を担っている。本クラスの保育室には、製作コーナーが常設され、その他にもままごとコーナー、積み木（プラフォーミング）コーナー、絵本コーナーが常設されている。遊びの時間において、担任保育者は、製作コーナーの壁側をベースとなる居場所とし、その場から、製作コーナーや他の場所にいる幼児達を見取り、必要な際に援助をすることを心がけている。また、この場に担任保育者がいることで、保育室のどの場にいる幼児からも担任保育者が見えやすい状況をつくっている（〈表1〉～〈表4〉を参照）。さらに担任保育者は、製作コーナーにおいて、粘土をこね、丸めるなど、なるべく大きな手の動きのある作業（遊び）モデルを意図的に提示することを心がけ、実践している。

本園の2歳児保育において、製作コーナーの壁側を担任保育者のベースとして保育をおこなうのは、人的環境として、保育者が作業をする姿を多くの幼児から見えやすい状況をつくるためである。幼児が保育者の作業を見ることから引きつけられ、同調的にその動作を共有することを想定しているのである。さらに、この場は保育室の端にあるため、保育者にとってもクラスのほぼ全員の幼児を見ることを可能にしている。よって、保育者と幼児との間に“見る－見られる”関係が構築されることで、幼児それぞれが安定した居場所をもちやすくなり、モノと向き合いながら遊びを展開できるようになると考えている。

#### (2) 観察および記録の方法

認定こども園A幼稚園の2歳児クラスにおいて、登園後の9時頃から10時15分頃までにおこなわれる保育室での遊び時間に、担任保育者を主に、保育者とクラスの幼児達の観察をおこなった。観察に

はビデオカメラを用い、製作コーナーを中心に、なるべく保育室全体が視野に入るよう撮影した。さらに、観察者は記録の補助としてフィールドノートおよびデジタルカメラを用いて記録した。ビデオカメラおよびフィールドノート等の記録は、4～7分ごとに、〈表1〉～〈表4〉に示したように、環境図によって保育者および幼児の位置等を記した。さらに、それぞれの場面での状況や言動を文書で記録した。また、観察日の保育状況を、より詳細に把握するため、担任保育者による前日の保育記録と、観察日前までと当日の主任保育者の読み取りをボイスレコーダーで聞きとり、それぞれ記録した。なお観察対象の概要、観察回数（時期）は以下のとおりである。

○対 象 園：栃木県S市認定こども園A幼稚園

○対象クラス：2歳児クラスB組（担任保育者1名、副担任保育者2名、幼児18名）

※担任保育者は、勤続3年目の保育者である。（当時）

○観 察 回 数：2010年11月より、対象の2歳児クラスを月2回のペースで観察した。2011年3月までに計7回の観察をおこなった。本稿では、2010年11月17日（水）と2011年3月11日（金）の記録を示す。

### （3）記録と考察

#### 1）記録

記録については、「〈表1〉記録①－1」、「〈表2〉記録①－2」、「〈表3〉記録②－1」、「〈表4〉記録②－2」を参照。（記録内において、担任保育者は（T1）、副担任保育者は（T2）（T3）と明記している。）

#### 2）考察①（「〈表1〉記録①－1」および「〈表2〉記録①－2」より）

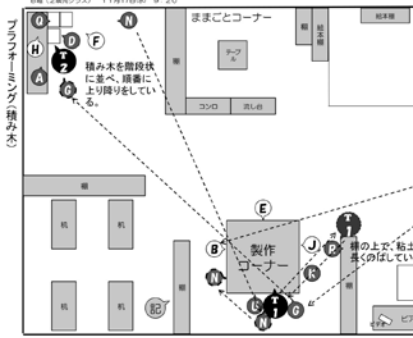
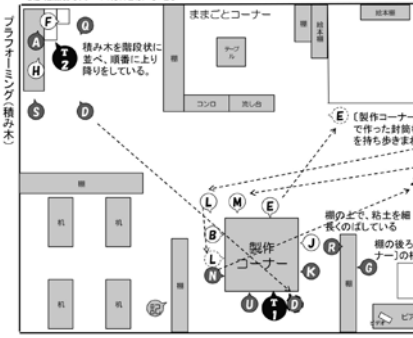
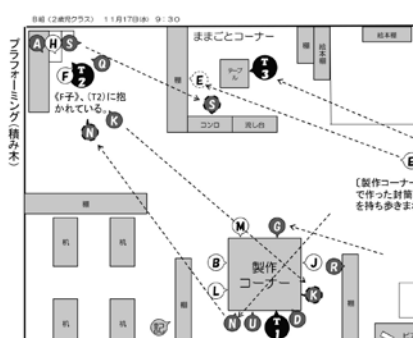
この時期（11月中旬）の2歳児クラスの担任保育者は、粘土を丸めたり、平状にするなど、このような保育者の作業（遊び）モデルを見ることや、保育者から手の入れられたモノをもらうことを通して、幼児が製作コーナーで作ることに興味をもち、実際に作って欲しいと考えている。さらに担任保育者は、製作コーナーにおいて、モノを介して幼児とコミュニケーションを図っていくことも視野に入れ実践している（下線a）。

本記録での、担任保育者は、必要時に幼児の傍に行き直接かかわる場面の他は、製作コーナーの壁側（定位置）に座り、粘土を使って手を動かす姿（記録の網掛け部分）がとても多く見られた。さらに、このような姿を見て、担任保育者がいる製作コーナーに引きつけられてくる幼児の姿も見られている（下線b④⑤）。担任保育者が定位置に座り、じっくり粘土を使った作業に取り組んでいる製作コーナーは、幼児にとって保育者が作業する姿を近くで見て、感じるができる場であり、その場がまずは居場所になっていることが考えられる。特に、登園後に自らの遊びを始められずにいる幼児などに、保育者の粘土を使った動作に引きつけられ、自らも保育者と同じような動作をおこなう姿があった（下線⑧⑨⑩）。幼児は、保育者と同調的に動作を共有する、この同調関係によって、製作コーナーを安定した居場所にできたことが考えられる。

一方で、本記録では、保育者の作る姿をじっと見ているが、自らが机の上にある箱から粘土を取り



〈表1〉記録①ー1：B組（2歳児クラス）2010年11月17日（水）9：20～9：35

<p>【前日の保育記録（担任保育者T1）のより】</p> <p>【製作】《R男》《F子》《G男》《B子》《H子》《C男》《E子》《Q男》《M子》《K男》：粘土 ⇒ 明日の粘土では型抜きやドングリを取り入れる。</p> <p>（T1）が型抜きをすると、《R男》《H子》が興味を持ち、一緒にやり出す。2人は型抜きをしながら、「出来た！」と教えてくれ、上手にできると満足しているようであった。《C男》に声をかけると、「上手に出来ない…」と言っていたので、（T1）も一緒にやりながら関わっていくと…、繰り返しやっていくことで、いろいろな型抜きに挑戦し、上手に出来るようになった。途中から（T3）にも〔製作コーナー〕に入ってもらい、粘土でオバケを作っていくと、《F子》《R男》《G男》《E子》《B子》《M子》《Q男》《K男》が椅子に座ってオバケ作りをしていた。《Q男》は作った作品をきれいに並べると嬉しそうだった。自分で型抜きを上手に出来ると嬉しくて自ら手に持ったり、持ち歩くこともあった。</p> <p>（ままごと）《D男》《L子》《U男》：弁当作り</p> <p>（T1）も加わり、《L子》が弁当を作っていると、《U男》《R男》《H子》も加わり、一緒に作る。《D男》は、（T1）がその場にいたのもあって入ってきたことが考えられる。《D男》も真似て弁当作りをしていた。</p> <p>【積み木】《S男》《A男》《K男》《N男》：乗り物</p> <p>《S男》は登園すると積み木で遊ぶ。並べた積み木を《S男》は「新幹線」、《A男》「機関車」、《C男》「バス」と言う。それぞれが想像して、乗って楽しむ。後半は、滑り台にして楽しんでいた。《S男》、最近、積み木を独り占めする場面も見られるので、今後様子を見ていくことにする。</p>	<p>【主任保育者による“前日まで”および“本日”の読み取り】（●：前日まで、◆：本日）</p> <p>●先週、園外保育でドングリ拾いに行ったので、ドングリなど秋の素材を〔製作コーナー〕に出すと、粘土のケーキにドングリを載せるなど、じっくり粘土遊びをする姿がでてきている。さらに、以前は丸めたり、延ばすことが主であったが、より興味を持ち、バリエーションが増えるよう、ここ最近に延べ棒や型抜きを出し、保育者も意図的にその使い方のモデルを示している。また、少し前に3歳児がお店やさんごっこに誘いに来たので、（T1）が紙でお金を作り、一緒に買いに行った。そこで、お店やさんに興味を持ち、自分でも作ってみたいとの気持ちが出てきている。その中で、（T1）が粘土をドーナツやパンに見立てると、自分でも作って、お店屋さんごっこまでいかにないが、パンなどに見立てて、それを介して友達との会話が起こってきている。</p> <p>◆（T1）が粘土で何かを作った後で渡すことについては、まずは作った物や作るモデルを示すことで作ることに興味を持って欲しい。また作った物を介して保育者とコミュニケーションを図ることを考えている。ただし、作ってもらった物で遊ぶことが中心になると、自分で作らなくなってしまうことも考えられるので、ずっとこのままではなく、始めは偶然出来たものからの見立てが中心であるが、だんだん自分でその物をイメージして作れるようになって欲しいと考えている。④</p> <p>●この頃、《N男》と《Q男》と一緒にふらふら動き回っていたり、みんなと離れてしまうことが多い。友達と一緒にいるのが楽しくなってきたり成長と取れているが、遊びにじっくり取り組めていないので、じっくり自分の遊びでも取り組めるよう（T1）が意識して援助している。</p> <p>◆今日の前半は、《N男》は粘土に向かい、《Q男》は積み木の所にいたので、お互い離れて遊んでいた。《N男》は、粘土で一遊びして、その後、〔積み木コーナー〕で《Q男》と合流し、次に〔絵本コーナー〕で一遊びしたが、前半に《N男》は粘土遊びにじっくり向かっていたので、後半もふらふら動き回ることには少なかった。</p> <p>●《D男》が、本日、（T1）の傍でずっと立っていたことに関して、以前はきょうだいに小さい子がいるのが甘えてくるが多かったが、最近はその様な姿はあまり見られなかった。自分で着替えるとか、積み木の遊びにも自分で入るとようになっていた。</p>
<p>9：20</p> 	<p>〔製作コーナー〕で、（T1）が粘土をこねている。その横で、《U男》が棒状の粘土を渦巻き状にしている。《K男》が、平状に伸ばした粘土から型抜きをしている。（T1）の対面にいる《E子》は、紙を折り、それをゼロテープで貼り合わせ、封筒状にしている。《G男》が登園し、（T1）の傍に来て話しかける。（T1）、粘土をこねながら、《G男》と話す。《G男》、〔積み木コーナー〕へ行く。</p> <p>〔積み木コーナー〕で、他児の遊びを見ていた《N男》が、〔製作コーナー〕に来て、（T1）の傍に来て、（T1）の粘土をのばしている様子を見ている。（T1）、それを見て、《N男》に皿状にのばしていた粘土を見せ、渡す。⑤《N男》、受け取りそれを机に置くと、棚から粘土板を取り出し、〔製作コーナー〕の椅子に座る。（T1）、立ち上がり、棚の上で粘土をしている《R男》の所へ行く。《R男》と話をし、〔製作コーナー〕の椅子に戻り座る。（T1）、粘土を丸め、丸めた粘土を《N男》に渡す。《N男》、「いくらってまるい」と言う。（T1）「どのくらい大きき？」《N男》「ちっちゃい」と言う。（T1）「ちっちゃくて、丸いんだ」と粘土を丸めながら伝える。《N男》、（T1）からもらった粘土から、少しつまみとり、丸め始める。（T1）、のべ棒で粘土をのばし始める。平状になった粘土をまるめ、カップ状（軍艦の海苔の部分）にする。それを《N男》に渡す。《N男》、受け取ると、じっと眺め、それを広げて、（T1）に話す。（T1）、うなづきながら、聞いている。⑥《B子》が登園し、〔製作コーナー〕の椅子に座る。</p>
<p>9：25</p> 	<p>《L子》と《M子》が登園し、カバンを棚に置くと、〔製作コーナー〕の様子を見て、近づいて来る。④</p> <p>（T1）、粘土を延べ棒で延ばし平状にし、それを見ていた《B子》に渡す。《B子》、受け取った粘土で型抜きをする。⑤（T1）、粘土を転がし棒状にする。それを見ていた《K男》に渡す。《K男》、受け取り、粘土板の上で転がし細い棒状にする。その後それを渦巻き状にする。⑥（T1）、粘土を丸くこねる。</p> <p>〔積み木コーナー〕にいた《D男》が〔製作コーナー〕の（T1）の横に来て、持っていた紙を見せ、何かを言う。（T1）、《D男》に応え、話す。《D男》、紙を持って、（T1）にすり寄りながら立っている。</p> <p>（T1）、丸めた粘土を《N男》の粘土板に置く。《N男》、立ち上がり、出入口の方へ行く。（T1）、その様子を見ている。</p> <p>《U男》、（T1）の横で、棒状の粘土を渦巻き状にしている。それを見て、（T1）、《U男》に話しかける。《L子》、空いている椅子（《N男》が座っていた椅子）を見つけ、座る。</p> <p>〔積み木コーナー〕で、《F子》が大声で泣いている。（T1）、粘土をこねながら、その様子を見る。（T2）が、《F子》を抱っこする。（T1）、その様子を確認して、改めて粘土をこねる。</p>
<p>9：30</p> 	<p>《N男》、〔製作コーナー〕に戻って来る。さっきまで座っていた椅子に《L子》が座っていたので、その横で戸惑う。（T1）、《N男》の様子に気づき、立ち上がり話しかける。さらに、椅子を出して、《U男》の横に置く。《N男》、粘土板を棚から取り出し、その椅子に座る。</p> <p>（T1）、椅子に座り、粘土をまるめる。《G男》、粘土板を持って、〔製作コーナー〕の周りをうろうろする。（T1）、その様子を見て、指さし、対面の席に座るよう促す。《G男》、椅子に座り、粘土をまるめ始める。⑥（T1）、粘土を小さく丸め、《J子》に渡す。《J子》、それを手に持ち、食べるふりをする。⑦</p> <p>（T1）、すぐ横で紙を持って立っている《D男》と話をし、《D男》、（T1）の粘土板の上にある粘土を触る。（T1）、小さく丸めた粘土をカット状（イクラの軍艦）にした粘土の中に入れる。《D男》、その様子を見て見ている。（T1）、粘土を丸めながら、対面にいる《G男》と《M子》に話しかける。（T1）、粘土でつくったイクラの軍艦を「いくらのお寿司、どうぞ」と言って、《N男》に渡す。《N男》、受け取り、食べるふりをする。⑧</p> <p>①《L子》が、（T1）に「お皿ー」と言う。（T1）、粘土でお皿を作り、《L子》に渡す。②《M子》が（T1）に「まるー」「まるく作って」と言う。（T1）、対面にいる《M子》に両手で粘土の丸め方を見せる。《M子》、それを見て、同じように粘土を丸め始める。⑨</p> <p>《N男》、立ち上がり、少し歩きまわってから〔積み木コーナー〕へ行く。（T1）、《N男》の様子を見て、〔積み木コーナー〕へ行ったことを確認する。</p>



〈表2〉記録①-2：B組（2歳児クラス）2010年11月17日（水）9：35～9：50

<p>9 : 35</p>	<p>目録 (2歳児クラス) 11月17日(金) 9 : 35</p> <p>プランターミッド(積み木)</p> <p>ままごとコーナー</p> <p>製作コーナー</p> <p>出入り口</p>	<p>(T1)、粘土をこねながら延ばし、お皿を作っている。《D男》が(T1)に話しかける。(T1)、聞きながら、粘土を延ばしている。(T1)、出来あがったお皿を《B子》に渡す。《G男》が、(T1)に細長く延ばした粘土を見せる。(T1)、それを見て、《G男》に話す。</p> <p>(T1)、粘土を丸めながら、傍で立っている《D男》と話す。《D男》、うれしそうに、(T1)に「やっぱりドーナツ」と言う。(T1)、応え、粘土でドーナツを作り始める。ドーナツが出来、《D男》に見せる。《D男》、「やっぱりおにぎり」と言う。</p> <p>(ままごとコーナー) いた《E子》が、鍋としゃもじを持って、(T1)の所へ来る。《E子》、(T1)に鍋を渡す。(T1)、受け取り、食べるふりをする。《E子》、(T1)から鍋としゃもじを受け取り、(ままごとコーナー)に戻る。(T1)、その様子を見ている。</p> <p>(T1)、粘土でおにぎりを作る。その様子を見ている《D男》に(T1)、「おにぎり」といって、粘土のおにぎりを渡す。《D男》、受け取り、食べるふりをしてしながら「〇〇〇の味がする」と言う。①</p> <p>《K男》が、[製作コーナー]の席を立ち、[積み木コーナー]へ行く。(T1)、《D男》に《K男》が座っていた場所をすすめるが、《D男》、動かず、(T1)の傍にいる。</p>
<p>9 : 40</p>	<p>目録 (2歳児クラス) 11月17日(金) 9 : 40</p> <p>プランターミッド(積み木)</p> <p>ままごとコーナー</p> <p>製作コーナー</p> <p>出入り口</p>	<p>《B子》が、(T1)に「おっきいの、おっきいの作って」と大声で言う。(T1)、粘土を丸めて延ばしお皿を作り、渡す。《B子》、受け取り、そこに、丸めてあった粘土を入れる。②[ままごとコーナー]の《E子》が泣く。(T3)が抱っこして慰めている。(T1)、[製作コーナー]から、その様子を見て、確認する。(T1)、《J子》に話しかけ、棒状の粘土を渡す。《J子》、棒状の粘土をへらで切る。(T1)、粘土を丸めながら、紙を持って傍で立っている《D男》と話す。《L子》が、お皿の上にたくさん小さな粘土を載せた物を持ち、(T1)に見せながら話す。(T1)、それ応え、手を差し出し受け取る。(T1)、食べるふりをして、そのお皿を《J子》に見せる。その後、《L子》に返す。</p> <p>《G男》、立ち上がり、(T1)に「リング作って」と言う。(T1)、応え、粘土を丸める。《D男》、粘土を丸めている(T1)の手を触っている。(T1)、丸めた粘土を、《G男》に渡す。《G男》、受け取り、へらで切り始める。《G男》、切ったリングを持って、「割れたリング」と言う。(T1)、「割れたリングなんだ」と応える。《G男》、粘土を切り始め、「バター切ってたんだよ」と言う。(T1)、粘土を丸めながら、「バターを切ってるの」と応える。③</p> <p>《D男》が[絵本コーナー]の方へ行く。</p>
<p>9 : 44</p>	<p>目録 (2歳児クラス) 11月17日(金) 9 : 44</p> <p>プランターミッド(積み木)</p> <p>ままごとコーナー</p> <p>製作コーナー</p> <p>出入り口</p>	<p>(T1)、粘土でお皿を作っている。《J子》が、作った物を持って、(T1)に見せる。(T1)、「おいしそう。《J子》ちゃん」と応えると、手を差し出す。《J子》、(T1)に作った物を渡す。(T1)、食べるふりをして、《J子》に返す。(T1)、粘土でドーナツを作り、《L子》に見せて渡す。[ままごとコーナー]から《E子》が、鍋としゃもじを持って、(T1)の所に来て、話す。(T1)、それに応え、粘土をまるめながら話す。《E子》、(T1)が丸めた粘土を持ち、触る。それを机に置いて、[ままごとコーナー]に戻る。《D男》が[製作コーナー]に戻ってきて、紙を持って(T1)の傍に寄りそって立つ。《D男》、(T1)の横の床に座る。</p> <p>(T1)、粘土でドーナツを作り、前の粘土板に並べる。《L子》、丸めた粘土を(T1)に見せ、「ドーナツ」と言う。(T1)、《L子》に粘土を転がし棒状を作る仕草を見せる。《L子》、(T1)に「こう?」と言いながら、(T1)と同じように粘土を転がし棒状を作り始める。④(T1)「じょうずじょうず、《L子》ちゃん」と応える。(T1)の前に作ったドーナツが3つ並ぶ。(T1)、床に座っている《D男》と話す。《D男》、手を伸ばし、ドーナツを触る。《B子》が、「先生、見て」と言って、ドーナツを目にあたりあて穴から覗いて見る。(T1)、《B子》と同じように、自分のドーナツの穴から《B子》を見る。</p>
<p>9 : 48</p>	<p>目録 (2歳児クラス) 11月17日(金) 9 : 48</p> <p>プランターミッド(積み木)</p> <p>ままごとコーナー</p> <p>製作コーナー</p> <p>出入り口</p>	<p>(T1)、《L子》の前にあった粘土が細かくなったので、それを転がして丸め合わせる。その様子を見ていた《L子》に渡す。《L子》、受け取ると、粘土板の上でさらに丸め合わせる。その後、棒状に延ばし始める。《L子》、それをドーナツ状にして、(T1)に見せ、話す。⑤(T1)、応える。</p> <p>《D男》が、[製作コーナー]の机の下に入り、(T1)の足元に座る。さらに、(T1)の足にもたれかかる。(T1)、《D男》を抱き起こす。《D男》、紙を持って立ち上がり、(T1)の傍でうろうろする。《D男》、机の下に入り、(T1)の足元から立ち上がる。《T1》、《D男》を抱っこしながら、粘土でドーナツを作る。</p> <p>[積み木コーナー]で、《R男》が泣きだす。(T1)、[製作コーナー]横の棚にオムツを取りに来た(T2)と話す。(T2)、[積み木コーナー]の《R男》の所に行く。(T1)、《D男》を抱っこしながら、ドーナツを作り並べる。(T2)と《H子》が、手をつないでトイレに行く。(T1)、その様子を確認する。</p> <p>《N男》と《Q男》が、絵本を持って、[製作コーナー]の近くに来る。(T1)、立ち上がり、《N男》と《Q男》に話をする。</p>

出し作業を始める幼児は少なく、丸めたり、平状にするなど、少し手を入れた粘土やそれによって見立てられた粘土を渡されることで遊びを始める幼児の姿が多数見られた（下線**②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯**）。このような手を入れた粘土を幼児に渡す行為は、保育者が、幼児が保育者の作っている姿（下線**②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯**など）を見て、その幼児がこの作業や見立てに関心をもって見取った時に、おこなっていることが考えられる。実際には、これをきっかけに、保育者と同じような動作（粘土を丸める、棒状にするなど）で作業をする姿があった（下線**②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯**）。このことから、この時期の幼児にとって、保育者の作る姿に魅力を感じ、引きつけられても、自らが粘土を取り出し作業を始めるためには、状況によっては何らかの援助が必要なが考えられる。保育者と幼児とがモノを用いた同調的動作共有に至るためにも、保育者は作る姿を提示しながら、それに幼児が関心を持っているかを見取り、少し手をいれたモノを渡す援助や見立てのイメージを伝える援助も必要と考える。一方で、時には、保育者は作る姿を提示することに主眼をおいてそれを継続し、幼児自らがモノを取り出し、同じように作り始めることを待つことも必要な援助の一つと考える。そのためにも保育者は作る姿を提示しながら、その姿を見ている幼児を見て、その状況や内面を見取った上で判断をすることが必要なのである。

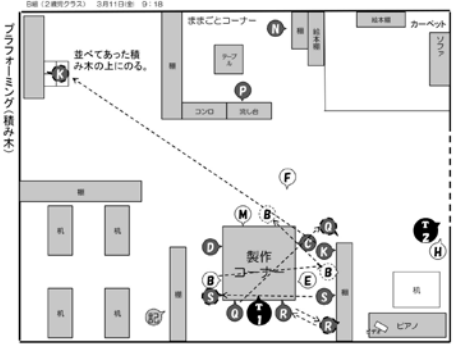
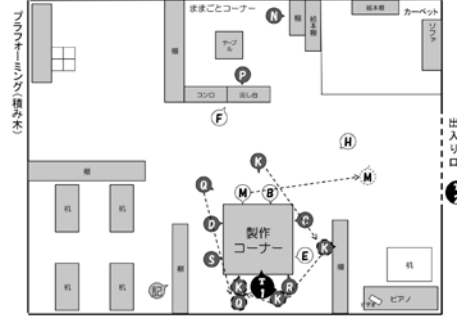
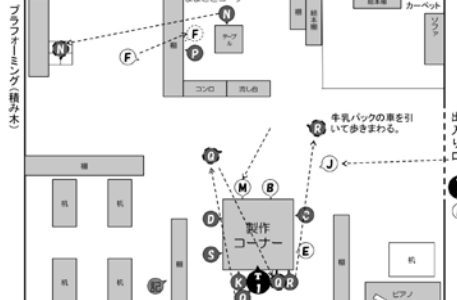
本記録において、保育者は、作るモデルを提示する、そしてその姿を見ている幼児を見る、さらにモノを介して幼児とかかわるといった援助をおこなった。それによって、幼児は見る行為から保育者と同調的に作る行為へと転換していったのである。よって、ここでは、製作コーナーにおいて保育者と幼児の間に、相互に“見る—見られる”関係も築かれてきていることが考えられる。この保育者と幼児との同調関係と“見る—見られる”関係を基盤にして、多くの幼児達が製作コーナーを安定した居場所とし、遊びを展開することができたと考えるのである。

### 3) 考察②（「表3」記録②-1」および「表4」記録②-2」より）

この時期（3月中旬）の2歳児クラスの幼児の多くは、これまでに製作コーナーでの担任保育者の作業モデルやその動作の同調的共有によって、粘土を丸める、こねるなどといった単純な手作業を繰り返し経験してきている。そのようなこともあり、製作コーナーで自ら何かを作りたいと思えるようになり（下線**②**）、作ったモノを用いてごっこ遊び（アイス屋さんなど）をおこなう姿も見られるようになっている（下線**①**）。このような他児の遊ぶ姿に触発されることで、作ることとそれを用いて遊ぶことも徐々に循環し始めている。そこで担任保育者は、保育者が意図的に提示する作業モデルを契機にしながらも、他児が作って遊ぶ姿にも関心を持ち、幼児同士で遊びを共有する姿が少しずつ増えていけるよう援助したいと考えている。

本記録の担任保育者は、特にその前半部に、作業モデルとして、車体となる牛乳パックの開け口をセロテープでとめて箱状にし、そこにカップを付けるといった車作りを繰り返しおこなっている（記録の網掛け部分）。この保育者の作業モデルを見ることを契機に、多くの幼児達が、棚から材料となる牛乳パックやカップを取り出し、自ら保育者と同じような牛乳パックの車を作っている（下線**③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯**）。一方で、これら幼児達の作業は、保育者の作業過程と同時平行でおこなわれているわけではないので、保育者の作業モデルの影響もあるが、それだけではなく、他児が作っている姿にも触発され、行動を起こしていることが考えられる。また、記録の後半部に、完成した牛乳パックの車

〈表3〉記録②－1：B組（2歳児クラス）2011年3月11日（金）9：18～9：29

<p>【前日の保育記録（担任保育者T1）のより】</p> <p>【製作】《R男》《N男》《L子》《B子》《H子》《A男》《U男》《K男》《S男》：ティッシュ箱を使ってバスなどの乗り物作りをしていく。</p> <p>《R男》《H子》、2人で隣りに座って作ると、その後も一緒になって走らせていた。それを見て、《N男》《S男》《A男》《K男》も作っていく。《B子》《L子》、オリジナルでキラキラテープをたくさん付けていた。《U男》、(T1)と一緒に作っていく。一人一人がイメージを持ちながら車を作っていた。</p> <p>《E子》《C男》《Q男》、ティッシュ箱で乗り物の上にプリンカップをのせたり、白紙に絵を描いて、貼っている姿もあった。</p> <p>一人の子が作っているのを見て、真似て作る子どもが多かった。また、テープの貸し借りで、時々《Q男》《E子》《R男》《S男》が一人でずっと使いたくて、使えないとへそを曲げる姿があった。(T1)も間に入り、みんなで使おうということを伝えていった。ティッシュ箱を出したことで、さらに物作りを楽しんでいるように思った。</p> <p>【積み木】《D男》《F子》《Q男》《K男》《N男》：基地&amp;乗り物</p> <p>《Q男》《N男》《R男》、乗り物作りをしていくと、《D男》《F子》達も加わっていく。飛行機、バスなど、乗り物に乗って出かけへ行く姿もあった。製作コーナーでティッシュ箱を使った車作りをする子どもが多く、その後引張って楽しむことが多かったので、積み木でトンネルなどを作れたら良かったのかなと思った。明日は、出来たらトンネル作りもしてみたい。</p> <p>【ままごと】《F子》《Q男》《H子》《R男》《L子》：料理作り</p> <p>ままごとコーナーの素材を使って、料理作りをしていく。《H子》、「豆!」と言い、広告紙を丸めて作っていた。《Q男》、毛糸を使って、ラーメンなどと、それぞれ料理作りを楽しんでいた。</p> <p>今後は、お店屋さんができるように、製作コーナーに紙などを用意しておく。</p>	<p>【主任保育者による“前日まで”および“本日”の読み取り】（●：前日まで、◆：本日）</p> <p>●最近、〔製作コーナー〕に、車などに見立てることができ、子どもにも作りやすい素材として、ティッシュ箱や牛乳パック、カップを出している。これらを用いて最初から子どもが作るのは難しいが、保育者が車などを作ってあげると嬉しがっていた。リボンも切っておき、それを付けて、引張って遊ぶと喜んで安心する姿もあった。2歳児クラスでは、コーナー間での遊びのつながりは難しいが、〔積み木コーナー〕にアーチなどを作って、車を引っ張りながらくぐって遊ぶことで、〔製作コーナー〕で作った物で、別のコーナーで遊ぶことを経験させてきている。〔製作コーナー〕で紙を丸め、それをくるくる巻いた紙に入れてアイスを作り、〔ままごとコーナー〕にそれを持って行き、アイス屋さんにして遊ぶ姿も出てきている。その様な姿を見て、他児も作りたいと言うなど、作った物で遊ぶ姿を見て、〔製作コーナー〕で作りたいという姿も少しずつ出てきているので、遊びを通して、それぞれの遊びが他児に広がってきたり、幼児同士で遊びを共有しながらかわり合うことを、より展開できるよう援助していきたいと考えている。①一方で、作ってないけれど、お店屋さんの「いらっしゃい」を言いたくて、参加しているなど、面白いと思ったところだけに素直に参加する子どももいる。</p> <p>◆作ることが面白いな、作って遊ぶことが面白いなと思えるようになってきている子どもが増えて来ている。実際に、牛乳パックやロール芯を持つだけで、作れず戸惑っている子どももいたが、材料を取り出して〔製作コーナー〕に来るなど、これらも子どもが作りたいと思っている表れではないかと感じている。また、今日は、とても多くの子どもが〔製作コーナー〕に集まって来ていた。</p> <p>●牛乳パックで何かを作りたいと思えるようになってきたのは、これまでに〔製作コーナー〕で保育者の作る姿に影響して、粘土を用いて、こねる、丸める、切るなど単純な作業であるが、この経験を十分にすることが大事だったのではと考えている。②</p>
<p>9：18</p> 	<p>〔製作コーナー〕で、(T1)が牛乳パックにセロテープをつけ、箱を作っている。(T1)の横で、《Q男》《B子》《R男》が粘土板の上で、粘土を丸め、多くの丸状を作っている。《E子》が、牛乳パックにセロテープをつけ、箱状にしている。《C男》、粘土板の上で、粘土で棒状をつくり、ヘラで切っている。</p> <p>(T1)〔製作コーナー〕の幼児達を見ながら、牛乳パックにセロテープをつけている。《Q男》、丸状の粘土を箱に片付け、立ち上がり、どこかへ行こうとする。(T1)《Q男》を呼び止め、粘土板を片付けるよう伝える。《Q男》、戻ってきて、粘土板を受け取り、棚に片付ける。(T1)「牛乳パックを箱状にする、リボンを取り出し、リボンの端を牛乳パックにつける。《B子》、粘土板の粘土を片づけ、棚へ行き、牛乳パックを取り出す。《R男》、立ち上がり棚に行き、牛乳パックを探し、それを取り出し、〔製作コーナー〕の席に戻る。③《S男》、ロール芯を2つ持ってきて、《B子》が座っていた席に座る。④</p> <p>〔ままごとコーナー〕で《P男》が、鍋に毛糸を入れたり、出したりしている。《P男》、うどんを作りながら、「うどん屋さんですよ」と何回も叫ぶ。(T1)《P男》の方を見る。《P男》と目が合い、ほほ笑む。(T1)《S男》がロール芯をつなぎ合わせようとするのを見て、それを押さえる。(T1)立ち上がり、主任と話をする。《S男》、セロテープで2本の芯をつなぎ合わせる。(T1)席に戻り、《S男》の様子を見て、「出来そうだ」と言う。《S男》、ロール芯をセロテープでつなぎ合わせる。⑤</p> <p>《B子》が、棚から牛乳パックを3本取り出し、先に座っていた席に戻ろうとする。⑥《B子》《S男》が座っていることに気づき、その周辺を歩きまわりますが、(T1)の対面の席が空いていることに気づき、座る。</p>
<p>9：22</p> 	<p>(T1)席に座る、牛乳パックにカップを付け始める。(T1)、テープを付けながら、〔製作コーナー〕の付近で、牛乳パックを持って歩き回る《Q男》に話しかける。〔製作コーナー〕の様子を見ていた《K男》が、棚に行き、牛乳パックとカップを取り出し、それを持って、(T1)の横に行く。(T1)の横に座っていた《R男》が、立ち上がり棚に行き、牛乳パックとカップを取り出している。⑦ (T1)、カップの付いた牛乳パックに、リボンの端をセロテープでつくる。(T1)、リボンを引き、牛乳パックの車をテーブルの上で、くるくると動かす。《K男》、テーブルの上で身を乗り出し(T1)の車が動くのをじっと見ている。《K男》《R男》がいなくなった(T1)の横の椅子に座る。《R男》が牛乳パックとカップを持って戻ってくる。⑧《R男》、うろろする。(T1)、それに気づき、《K男》に「ここ《R男》君が座るから、ここに…」と、(T1)の反対隣の席を指さす。《K男》、(T1)に抱きつくようにして、(T1)の反対隣りに行って、その席に座る。</p> <p>(T1)、完成した牛乳パックの車をテーブルの中央に置く。それを見て、《K男》が「バトカー」と大きな声で言う。それを聞いて(T1)、車を指さして「バトカー」と言う。(T1)の横の《R男》、牛乳パックを持って、(T1)に何か話しかける。(T1)「消防車？」と返答し、《R男》の牛乳パックを取り、開いた口を押さえ、《R男》にテープでとめるよう伝える。《R男》、テープをとり、牛乳パックの口をテープでとめる。⑨ 牛乳パックを持った《Q男》が(T1)の横に来て話しかける。(T1)、話を聞いて、応える。</p>
<p>9：25</p> 	<p>《M子》が、箱と紙を持って、〔製作コーナー〕に戻って来て席に座る。《M子》、〔製作コーナー〕の他の幼児達の様子をじっと見ている。⑩ (T1)《R男》の牛乳パックをテープでとめ、箱状を作っている。(T1)、箱状の牛乳パックにカップをつけ、セロテープ台を指差し、《R男》にとめるよう伝える。《R男》、テープを取り出し、カップを牛乳パックにつける。《J子》、登園し、保育室の中へ入って来る。(T1)《J子》に気づき、手を振って、「おはよう」と伝える。(T1)《R男》が牛乳パックにリボンをつけようとしているのを見て、貼る位置を伝え、リボンの端を押さえる。《R男》、セロテープを取り出し、リボンを牛乳パックに付ける。《E子》、作っていた、牛乳パックの乗り物を持って、(T1)の側に行き、話しかける。(T1)「乗り物を見ながら応える。《E子》、自分の席に戻り、座る。《R男》、完成した牛乳パックの車を持って、立ち上がり、保育室中央のスペースへ行き、歩きまわってリボンを引っ張って車を走らせる。⑪ 《Q男》《R男》が(T1)の隣り席から離れたのを見て、牛乳パックを持って、急いで(T1)の隣り席に座る。《B子》《Q男》に「空いているよ」と言って、(T1)の隣り席を指さす。⑫ (T1)《Q男》の牛乳パックを取り、開いた口を押さえる。《Q男》のそこをとめるよう伝える。《S男》がロール芯をつなぎ合わせ、銃ができる。(T1)に、それを見せ、話す。(T1)牛乳パックの口を押さえながら、《S男》の話を聞いている。</p>



〈表4〉記録②-2：B組（2歳児クラス）2011年3月11日（金）9：29～9：46

9：29		<p>〔製作コーナー〕の(T1)、「E子」と《Q男》の車作りを手伝っている。3歳児クラスの複数の幼児達が、出入り口に来て、「お化け屋敷やってくるから来てね。」と言う。〔製作コーナー〕の幼児達、出入り口の方を見る。(T1)、作業をしながら、出入り口の3歳児達を見る。3歳児達、自分のクラスに戻っていく。〔製作コーナー〕の《S男》、ロール芯で作った銃の先に、新たに芯を付けようとしているが、上手く付けられずに困っている。(T1)、「S男」の持っていた芯を押さえる。《S男》、テープを取り、つなぎ合わせる。《S男》、つなぎ合わせた銃を、(T1)に渡して見せる。(T1)、「できたね」と銃を持って遊ぶ。さらに、つなぎ方が弱いところを、《S男》に教える。《S男》、セロテープを取り、そこをつなげる。⑬</p> <p>(T3)と〔積み木コーナー〕で遊んでいた《H子》《F子》《N男》《D男》が、3歳児クラスのお化け屋敷ごっこに行くために、保育室を出ていく。《R男》、牛乳パックの車を持って、「ままごとコーナー」と〔製作コーナー〕の周辺を歩き回り、《B子》の横に来て、《B子》の様子を見ている。</p> <p>〔製作コーナー〕で、《S男》が、セロテープを近くに置いて使っている。《B子》が、「先生ー、テープ」と言う。(T1)、「S男」の近くのテープ台を取ろうとするが、《S男》が「うー、うー」と叫びながら、テープ台を渡さないようにする。(T1)、テープ台を取ると、《S男》「だめー」と言う。(T1)、「S男」の横に座って話す。《S男》、テープ台を離さず、使い続ける。(T1)、「S男」の銃作りを手伝いながら、テープ台のことを話す。《M子》が2つのロール芯をつなげ、長い筒状にしようとしている。(T1)、芯を押さえ、《M子》がテープを貼りやすいようにする。《M子》、テープで貼り、長い筒を作ろうとしている。⑭ 《K男》、立ち上がり、作った車を持って(T1)の所に来る。《K男》、車を(T1)に見せ、話しかける。(T1)、応える。《K男》、車を持って、〔積み木コーナー〕のへ行く。</p>
9：35		<p>〔製作コーナー〕の(T1)、牛乳パックとロール芯を持って座っている《B子》の様子を見て、立ち上がり、近づいて、話しかける。《B子》、(T1)に「メガネ…」と言う。(T1)、「メガネ作ろうか」と言って、ロール芯を2つ受け取り、合わせて見せる。《B子》、セロテープを取り、芯をつなぎ合わせ始める。⑮ (T1)、リボンの付いた牛乳パックの車を持っていく。《R男》に話しかける。(T1)と《R男》、〔積み木コーナー〕へ行く。《R男》、リボンで車を引っ張り、(T1)について行く。</p> <p>〔積み木コーナー〕の(T1)、積み木を上に積み始める。《R男》、その様子を見ている。(T1)、別に〔積み木コーナー〕を積み上げ、アーチを作る。《R男》、車を持って、その様子を見ている。アーチが出来ると、近くにいた《K男》が牛乳パックの車を持って来る。《K男》、車をアーチの上に載せ、さらに積み木を持ってきて、アーチを広げ始める。⑯ それを見ていた《R男》も、積み木を持って来て、アーチにつなぎ始める。(T1)、2人の様子を見て、〔製作コーナー〕に戻り、牛乳パックを開き口をテープでとめ、箱を作り始める。〔積み木コーナー〕の(T1)達の様子を見ていた《G男》、(T1)を追いかけ、〔製作コーナー〕に行き、棚からロール芯を4つ取り出し、(T1)の横に座る。(T1)、「G男」がロール芯を持ってきたのを見て、つなぎ合わせ方を見せる。《G男》、芯をテープでつなぎ始める。⑰ (T1)、それを見て、改めて牛乳パックの箱を作り始める。</p>
9：38		<p>〔製作コーナー〕の(T1)、牛乳パックをテープでとめている。《Q男》がセロテープ台を一人で使おうとして、《E子》ともめる。(T1)、テープ台を持ち、《Q男》に話す。テープ台を置くと、《E子》も使い始める。《R男》が、〔積み木コーナー〕から、カップがはずれた牛乳パックの車を持って来て、(T1)に見せ、話す。(T1)、それを受け取り、カップを車につける。3歳児のお化け屋敷ごっこに行っていた幼児達と(T3)が戻って来る。お化け屋敷に行っていた《N男》と《D男》が、〔製作コーナー〕の前に来て、うれしそうに「怖かった、怖かった」と言う。(T1)、ほほ笑んで「そう、怖かったの」と言う。《N男》《D男》、〔積み木コーナー〕のアーチを見つけ、走って行く。《R男》も修理の済んだ車を持って、〔積み木コーナー〕に走って行く。</p> <p>(T1)、「Q男」が牛乳パックにロール芯を付けようとしているのを、手を添えて手伝う。《Q男》、芯をテープで牛乳パックに付ける。⑱ 《B子》、完成した牛乳パックの車を2つ持って、中央のスペースを歩きまわり始める。《E子》、(T1)の所に戻って来て、「お化け屋敷に行ってみようか」と言う。(T1)、「お兄さん達が、またやってくるよと言いに来たら行ってみようか」と応える。《E子》、また車を持って、歩きまわり始める。《S男》が作った銃を(T1)に見せ、話しかける。(T1)、応え、銃を受け取り、銃を持って構える。《S男》、その姿を見て、「あー、あー」と応える。(T1)から、銃を受け取る。《S男》、銃を持って立ち上がり、嬉しそうに「ままごとコーナー」の方に向けて構え、「パン、パン」と大きな声を出す。</p>
9：42		<p>保育室を歩きまわっていた《H子》が、〔製作コーナー〕に近づいて来る。(T1)、「H子」の様子に気づき、近づき、しゃがんで話をする。《H子》、〔製作コーナー〕の他児の様子を見て迷っていたが、(T1)が棚から牛乳パックを差し出すと、「うん」とうなづく。《H子》、牛乳パックを持って、〔製作コーナー〕の椅子に座る。⑲ (T1)、「ままごとコーナー」に行き、コンロで料理を作っている《P男》に話しかける。《P男》、大皿に作っていた料理を(T1)に差し出す。(T1)、食べるふりをする。(T1)、大皿を《P男》に返す。《P男》、テーブルの方に振り向いて、作り始める。(T1)、その様子を見て、〔積み木コーナー〕へ行く。(T1)、崩れていた積み木のアーチを改めて積み始める。その様子を見て、《R男》と《K男》が、(T1)と一緒に積み始める。〔製作コーナー〕にいた《H子》が牛乳パックを持って、(T1)の横に来て、寄り添う。アーチが完成する。〔積み木コーナー〕にいた幼児達が、四つん這いになって、アーチをくぐり始める。(T1)、その様子を見て、《H子》と一緒に〔製作コーナー〕に戻る。</p>

を保育室中央や積み木コーナーで引っ張って遊ぶ姿（下線⑪⑫）もあり、このような他児が作ったモノを見立てて遊ぶ姿を見て、牛乳パックの車を作り始めている（下線⑲）ことも考えられるのである。つまり、保育者の作業モデルが、幼児の作って遊ぶことの契機になっていることは確かであるが、これ以前の記録で見られたような保育者と幼児との同調関係や“見る－見られる”関係によって、製作コーナーでの遊びが展開されるのではなく、他児の作る姿や作ったモノを用いて遊ぶ姿をも見て、幼児の作る活動が促されていることが考えられる。さらに、保育者自身の作業モデルに本記録では見られなかったロール芯についても、それを用いたある幼児の作る姿や遊ぶ姿から、他児達のロール芯を用いた製作活動に広がっていく姿（下線④⑤⑬⑮⑰⑱）も見られた。この幼児達が自ら展開しようとする製作活動に対して担任保育者は、幼児それぞれが上手くいかずに戸惑っている時に援助している姿が見られた。

製作コーナーでの保育者と幼児との同調関係や“見る－見られる”関係から、自ら作ることに関心をもちだした幼児達は、この時期、遊びの契機となる作業モデルを保育者から見ただけではなく、他児が作る姿や作ったモノを用いて遊ぶ姿からもそのモデルを見いだしている。つまり、製作コーナーにおいて、保育者と幼児との関係を基盤にして、幼児同士の間にも“見る－見られる”関係が築かれていることが考えられる。そのことによって、幼児同士で真似し合う（学び合う）ことも生じ、幼児の作る活動と作ったモノを用いて遊ぶ活動がより活性化されていることが考えられるのである。よって、ここでの保育者は遊びの契機となるような作業モデルを示すことも重要であるが、保育者の作業モデルとは別の幼児間の関係性から展開されようとする遊びにも目を向けることが必要である。つまり、このような状況が起こるのは幼児達がある程度自立して遊びを展開し始めていることであり、保育者はこのような幼児同士の遊びに対しても、必要な際にかかわるといった援助が必要となっていくのである。

#### 4. おわりに

認定こども園の2歳児クラスを対象とした本研究では、2歳児保育の遊びにおいて、保育者と幼児との関係性および幼児間の関係性、この2つの関係性を保育者の意図的な保育の営みによって有機的に融合することで、豊かな遊びが展開され、この時期の幼児の発達が促されていくと考えている。そこで2歳児保育の実践において、保育室に常設されることが、これまでにはほとんどなかった製作コーナーの保育環境としての可能性に着目した。

一方で、これまでの2歳児保育の遊びにおける保育環境に関する研究等では、自己の世界を築くといった観点から、個々の幼児が十分にモノとかかわれる物的環境の構成を重視するといった議論が多かった。もしくは、幼児同士の同調性を重視するという観点から、少数の幼児達が入れる小空間（物的環境）を整備するといった議論もあった。このどちらにおいても、2歳児保育の遊びの実態を見れば、この時期の幼児の発達的特徴と合致していることが考えられる。しかし、これまでの本研究から導かれた見地から鑑みると、これらの議論では、物的環境にかかわる幼児側の行為が契機となることを重視しており、物的環境にかかわる人的環境としての保育者の存在という要因については十分に議論されていないことが考えられる。

また、2歳児保育の集団保育としての実践を想定するなかでは、自ら物的環境に積極的にかかわれる幼児達はともかく、それができずに不安定な状況にいる複数の幼児達に対し、保育者はどう援助することができるのかについても考えることが必要である。保育者は、未だに不安定な複数の幼児達に対し、同時に個々にかかわることは、状況的に困難だからである。これについて、2歳児保育では、制度上6人の幼児に1人以上の保育者が配置されており、少人数に対応している。よって、個々への対応も可能であり、その際の援助の中心になるとの議論もあるかもしれない。しかし、実際の2歳児保育を大局的にみてみると、保育者は遊び場面において、個々の幼児に対する援助だけではなく、クラスの複数の幼児達に、なんらかのかたちで人的環境として間接的に関与していることが考えられるのである。

そこで本研究では、2歳児保育の遊びにおける人的環境としての保育者の存在について、その要因がもつ意味を重視し、ここまで議論をすすめてきた。そのなかで、製作コーナーにおいて人的環境としての保育者が、意図的にモノを用いた手の動き（作業モデル）を提示することで、保育者と幼児達との同調的動作共有が起これ、保育者と幼児達との同調関係が築かれていくことを明らかにした。この同調関係によって、不安定な多くの幼児達も製作コーナーを安定した居場所とすることができ、主体的にモノを用いた遊びを展開することができるのである。さらに、保育者と幼児達との同調関係を基盤にして、幼児は保育者や他児の遊びモデルを見る、保育者は保育者や他児の姿を見て遊んでいる幼児を見取る、そして必要な際に援助する、といった保育者と幼児、幼児同士の“見る—見られる”関係が築かれていく。このような“見る—見られる”関係を構築されることによって、この時期の幼児は、他児とのかかわり合いのなかで、遊びの幅を広げていき、自らの遊びを展開していけるようになるのである。

## 引用文献

- 1) 高橋健介「遊び保育における製作コーナーの意義とその実践の在り方」『幼稚園じほう』第40巻第2号 2012 p.14
- 2) 木下孝司「ゆれ動く2歳児の心」木下孝司・加用文男・加藤義信編著『子どもの心的世界のゆらぎと発達』ミネルヴァ書房 2012 p.40
- 3) 山本登志哉「2歳と3歳 群れ始める子どもたち：自律的集団と三極構造」岡本夏木、麻生武編『年齢の心理学—0歳から6歳まで』ミネルヴァ書房 2000 p.119
- 4) 無藤隆『協同するからだ—ことば— 幼児の相互交渉の質的分析』金子書房 1997 p.81
- 5) 瀬野由衣「2～3歳児は仲間同士の遊びでいかに共有のテーマを生みだすか—相互模倣とその変化に着目した縦断的観察—」『保育学研究』第48巻第2号 2010 p.51
- 6) 瀬野由衣「2歳児から見えている世界」木下孝司・加用文男・加藤義信編著『子どもの心的世界のゆらぎと発達』ミネルヴァ書房 2012 p.70
- 7) 前掲3) p.135
- 8) 阿部和子「乳児保育再考Ⅴ—1、2歳児の保育室の環境について—」『聖徳大学研究紀要 短期大学部』第36号 2003 p.58
- 9) 同上 p.64
- 10) 今井和子「2歳児室の環境構成のポイント」榊原洋一・今井和子編著『乳児保育の実践と子育て支援』ミネルヴァ書房 2006 p.153

- 11) 中山昌樹・小川博久編著『遊び保育の実践』ななみ書房 2011 p.44-p.48
- 12) 小川博久『遊び保育論』萌文書林 2010 p.98
- 13) 前掲1) p.15

## 謝辞

本研究を実施するにあたって、認定こども園あかみ幼稚園2歳児クラス担任（当時）坂原由華先生、副担任（当時）村上直子先生、小野潔代美先生をはじめ認定こども園あかみ幼稚園の先生方より多大なるご支援とご協力をいただきました。ここに記して感謝申し上げます。



The Meaning of Making a Corner in the 2-Year Old Class for Playtime  
— Forming of the Synchronal Relation and the Seen Relation to See Each Other for  
Kindergarten Teacher and Child —

TAKAHASHI Kensuke NAKAYAMA Masaki NAKADA Sachiko INOKOSHI Megumi

The meaning of making a corner in the 2-year old class and the support for children about playtime is reviewed by analyzing the observed documents of the kindergarten. The intention model of a kindergarten teacher in making a corner makes a synchronism of motions which uses material. Then, the kindergarten teacher and child become the synchronal relation. This relation in making a corner is formed of independent play which concerns materials for the 2-year old child. Also, by sync-ability's rise this relation changes to the "seen" relation to see each other at kindergarten teacher and child, among children. By imitation of each other, child develops play in the 2-year old class.

**Keywords:** 2-year old class, play, making a corner, synchronal relation, "seen" relation to see each other